

コネチカットカレッジ日本語 201 ツイッタープロジェクト：
21 世紀のスキルの発達
CONNECTICUT COLLEGE JAPANESE 201 TWITTER PROJECT:
DEVELOPING 21ST CENTURY SKILLS

小林久恵、コネチカットカレッジ
Hisae Kobayashi, Connecticut College

1. はじめに

言語学習に於いて、オンライン教材・ビデオ教材の発達や YouTube などの普及で日本語学習者がオーセンティックな日本語を見聞きする機会が増え、いつでもどこにいても日本語に触れられるようになったが、ほとんどが『受動』活動である。言語の『産出』活動と『相互行為』活動を助けるオンライン教材も増えつつあるが、環境が十分整っているとは言えない。本大学の日本語コースでも、オンライン教材や自己学習のためのサイトのリンクなど Moodle に載せ、日本語学習者が使えるように学習環境を整えているが、実際にこれらの教材やサイトを教室外で頻繁に使用している日本語学習者は少ない。さらに、本大学の日本語コースには、以下のような課題がある。1) 日本語学習者には教室外に於いて日本語でコミュニケーションをする機会が極めて少ない。2) 教室外で、日本語でコミュニケーションさせようとしても、学習者への動機付けが難しい上、動機付けできても限られた日本語話者になってしまう。3) 日本語初級・中級ではオーラルコミュニケーションを中心にカリキュラムが進められ、日本語学習者の『書く』スキルの練習量が少ない。4) Can-do ステートメントの中の『相互行為』の練習をカリキュラムにもっと取り入れたい。5) 日本語のコースを通して、日本語学習者の 21 世紀のスキル育成に貢献したい。

ボラウ達は、先行研究で「ツイッターはコミュニケーション力や文化理解能力をトレーニングするのに適している。」と述べている。(Borau et al. 2009) そこで、先述の課題の対応策として、本大学の日本語コースでツイッターを用いた言語活動を試みた。本稿では、中級日本語コースに導入したツイッターによる言語活動、その実践と効果、日本語学習者・日本人学生の反応を報告する。

2. 現状と背景

コネチカットカレッジは東海岸コネチカット州ニューロンドン市在、学生数約 1900 名、共学の小規模リベラルアーツ大学である。周辺に日本人コミュニティはなく、学生はキャンパス内に住むため、日本語学習者が学期中に日本人と出会う機会はほとんどない。日本からの留学生の人数は少なく、その留学生と学習者とのコミュニケーションは英語というのが現状である。

日本語学習者は初級から上級まで、お互いに知り合い、小さいコミュニティを作っている。日本語学習者に留学生も合わせると日本語話者のコミュニティがあると言える。しかし、コミュニティ内の限られた日本語話者としてしか話さないという欠点もある。その上、このコミュニティ自体、数年前と比べるとメンバーの絆は弱くなり、お互いの人間関係が希薄になってきている。これは、個人のコミュ

コミュニケーション力の低下に関係があるのではないかと考える。コミュニケーション力の低下は日本語の授業中にも顕著に現れ、グローバル化が進む中、今後益々コミュニケーション力の強化の必要性が高くなると言えるのではないだろうか。

21世紀スキルマップによると、テクノロジーは単なる道具としてではなく、学習効果向上のためにインストラクションと組み合わせて導入するとある。言語学習の目的の一つに、言語学習者が母語話者とコミュニケーションをするために学習言語を使うスキルを身につけることが挙げられている。また、教室を越えた環境で言語を使うことも目的の一つになっている。さらに、言語学習の中で3つのモード、『受動』『産出』『相互行為』に焦点を当てる必要性も述べられている。オーセンティックなリソースの使用や、個別のタスク、評価や学習評価基準、評価基準の学習者との共有、結果を多数の人と共有するなどが、21世紀の言語学習を取り巻く環境であると言えるだろう。

さて、本大学にはファカルティのための **Technology Fellow Program (TFP)** があり、プログラム参加者にはコースカリキュラムにデジタルテクノロジーの使用が義務付けられている。このプログラムの目的はデジタルテクノロジーの使用により、授業の目標を学習者により深く理解させ、学習者の学習を高め、学習者の教室での経験をよりよくすることにある。筆者は、2015年の春学期から2016年の春学期まで3学期間このプログラムに参加し、ツイッタープロジェクトを提案し、TFPの協力を得て、このプロジェクトを実践するに至った。

3. 実践報告

ここでは、実際に計画からプロジェクトの実施まで、プロジェクトの実践と内容、プロジェクトの終了までについて報告する。

3.1. 授業計画

このプロジェクトの計画準備は2015年の6月から行われ、ツイッターを使用した言語活動を日本語中級の秋学期にすることにした。これは、春学期になると日本の大学では実質的に1月末から春休みに入ってしまう、日本の大学生が日本語学習者とコミュニケーションを取らなくなってしまうのではないかと憂慮したことによる。日本語学習者にとって日本語学習の3学期目の授業で不安もあったが、大きな問題もなくプロジェクトを続けることができた。ただ、後のセクションで詳しく説明するが、日本語中級学習者にはかなり難しいタスクであったようだ。

ブログではなくツイッターを使用ツールに選んだ理由は、字数に限りがあるので(140字)日本語中級学習者に適度な長さだと考えたこと、アカウントが作り易いこと、一人でいくつもアカウントを持つことができることである。ハッシュタグ名は#CCjpn201にし、早めにアカウントを開けておいた。プロジェクト参加者はプロジェクトのための新しいアカウントを作っても、既に持っている自分のアカウントを使っても良いことにした。個人の保護のために、本名を使わずハンドルネームを使っても良いとしたが、ハンドルネームを使用する場合そのネームの提出を義務付けた。ツイッターは手軽である反面、アカウントがあれば誰でも

返信できることから、攻撃的なツイートや迷惑なものを受け取る可能性を否定できない。学習者の自己防衛のために、対応の仕方を文書で説明して備えたが、幸いなことに懸念されたツイートを受け取る学習者は一人もいなかった。

ツイッターの使用を決めた後、評価のためのルーブリックを作りに取り掛かった。『日本語教師のための評価入門』（近藤ブランン、2012）を参考にし、出来上がったルーブリックは Moodle に載せることにした。これは、合計点がすぐ出ること、記録が残せること、学習者と共有できることからである。ツイッタープロジェクトの成績はコース全体の 10% を占めると定めた。

ツイッタープロジェクトの目的、ツイートの頻度、評価方法など、英語で詳しく書いた説明書を作り、学習者に配布した。説明書にはツイートの例を載せ、日本語学習者が理解しやすいように配慮した。プロジェクトの説明は授業で行い、説明の当日、テクノロジー担当者にアカウントの作り方、ツイートのやり方等基本的な操作方法を日本語学習者に直接教えてもらった。各日本語学習者には筆者のツイッターのアカウントをフォローさせた。

ツイッタープロジェクトの 2015 年 9 月 6 日から始め、13 週間続けた。その後、日本語学習者は今までのツイートの内容を各自のテーマに沿って Storify を使ってまとめ、クラス発表を日本語で行い、其々の Storify をツイッター上に載せ、プロジェクトの終了とした。

3.2. 参加者

参加者は日本語中級コース JPN201 の学習者 6 名で、大学 3 年生 2 名、大学 2 年生 4 名、大学 1 年生 1 名である。国籍はアメリカ人 (2)、中国人 (2)、インド人 (1)、そして韓国人 (1) となっている。男女比は 4 対 2 で、日本語中級学習者の 5 名は日本語学習歴 3 セメスター目で、韓国人学習者は高校で日本語を学習しプレースメントを受けて日本語中級に入った者である。

日本の大学生の参加登録者数は 27 名だったが、実際にツイートに参加した者は 19 名だった。男女比は 4 対 15 で、参加者の大学名は同志社大学、札幌大学、津田塾大学、早稲田大学である。日本の大学生の登録者数と実際のプロジェクト参加者数の違いは、登録を申し出た日本の大学生の中に、ツイートを全然しなかった大学生がいたためである。

日本の大学生の参加者は全員ボランティアで、大学のインターカルチャーセンターや国際課の担当者、日本語教授法の担当教授を通して、参加者のボランティアを募集した。興味を持った大学生はプロジェクト担当者へ直接メールを送るよう募集案内に明記し、メールを送って来た日本の大学生へプロジェクトの詳しい内容を E メールで説明した上で、趣旨に同意した学生からアカウントとハンドルネームの情報をもらい、登録の終了とした。募集に締め切りを設けなかったことで、プロジェクト終了近くになって参加したボランティアの日本の大学生もいたが、プロジェクト開始当初に登録した日本の大学生全員が期間中ツイートを続けてくれた訳ではなかったため、結果的にはツイートをしなくなった日本の大学生を補填するような形になった。

3.3. 方法

このプロジェクトの目的を「日本の大学生生活を知る」こととし、日本へ留学する学生のためにガイドを創ることを目標に定めた。月曜日から金曜日まで毎日1回、質問か返信のツイートをして情報を集めるように学習者を指導した。ツイートの使用言語は日本語とし、日本の大学生へも英語を使わないようお願いした。日本語学習者も日本の大学生も自分のツイートにハッシュタグをつけることを義務付けた。ハッシュタグを付け忘れたツイートについては、回数に数えないと日本語学習者に伝え、付け忘れのないよう指導した。日本の大学生はどの日本語学習者のツイートに返信しても、どの日本語学習者に質問をしても良いと指示した。

3.4. 内容

日本語学習者の最初のツイートはいずれも簡単な自己紹介と質問という形式を取り、質問の内容は、日本の学食、寮のこと、夏休み、専攻、クラブ活動、文化祭についてであった。

アニメクラブの部長をしている日本語学習者 A の場合、アニメなどで得た知識を使って、日本の文化祭について質問し、日本の大学生 F の文化祭と日本語学習者の学生のイベントを比べていた。他にも、聞いたことがある日本の事情について質問をし、回答を得ている。これをきっかけに、この二者間で日米の大学生の未成年の飲酒について現状の説明、意見交換、そしてお互い同意するまで会話が発展した。

日本語学習者 A：日本の大学生たちは授業の後でなんの何をしますか。週末、Fさんはなにををするんですか。日本の大学生はよく一緒にお酒を飲みに行くと言いましたが、ほんとうですか。

日本の大学生 F：Aさんこんばんは。授業の後は人によってはサークルやアルバイトをすることが多いと思いますね。日本の大学生がお酒を飲みに行くことはよくありますよ！私は未成年で飲めなかったので、週末にはアルバイトをしたり友達と遊んだりしていました。

日本語学習者 A：そうですか。私も未成年で、お酒があまり好きじゃありませんが、私の大学にはお酒を飲む未成年がたくさんありますよ。寮にはいくつかのお酒のパーティーがあります。Fさんは寮に住んでいますか。日本の大学の寮には、このようなパーティーがありますか。

日本の大学生 F：アメリカでは未成年もお酒が飲めるんですか？今はノルウェーの寮に住んでいます、日本では寮ではなくアパートに住んでいました。日本の大学の寮についてはあまり知らないのですが、たぶんパーティーをするより友達とお酒を楽しむことが多いと思いますね。

日本語学習者 A：未成年がお酒を飲むのは違法ですよ。けれども、いくつかの未成年がそれにもかかわらず飲みます。悪い考えだと思います。Fさんはアパートに住んでいましたか。どうしてですか。多くの大学生はアパートに住んでいますか。

日本の大学生 F：Aさんに同意です。日本の未成年も年齢を隠して飲むことが多いですね。20歳になるまで我慢するべきです。アパートの方が自分の部屋でくつろぎやすいので住んでいました。一人ぐらしの大学生の多くはアパートに住んでいると思いますよ。

上記のツイートのやり取りに8日ぐらいかけているが、お互いにツイートの会話をうまく続けていった様子が見える。その後も、寮とアパート、交通手段、宿題、期末試験と最後の週までこの二者間のツイートは続けられた。

どの日本語学習者のツイートを見ても、プロジェクトが始まった頃は、物や事などの具体的な内容が多かったが、週が進むにつれ次第に抽象的なことや、主義、考え方などについてツイートできるようになった。プロジェクトの終わり頃には、実際に本大学内であった学生の抗議活動について報告し、日本の大学の学生の抗議活動についてツイートのやり取りが行えるようになっていった。

3.5. モニターとフィードバック

日本語学習者のツイートは毎週モニターし、ループリックを使用し評価した。日本語学習者のツイートをモニターするにあたっては、TweetDeckとTwitter Archive Google Sheet (TGAS)を使用した。TGASはハッシュタグで検索するため、ハッシュタグに載らないツイートの内容は含まれない。そのため、TweetDeckにハッシュタグに載らないユーザーのコラムを設けてモニターした。授業計画とところで述べたが、ループリックはMoodleに載せ、日本語学習者と共有した。また、毎週月曜日にループリックの評価結果とコメントを書いたプリントを各日本語学習者に渡した。日本語学習者の常習化している日本語文法や語彙の誤使用については、コメントの中で詳しく説明し、日本語学習者の自己訂正が可能になるように指導した。基本的には日本語学習者のツイートの文法や語彙の間違いについて一つ一つ訂正しないことにしていたが、誤解される可能性が高い語彙の誤使用について、個別にツイートをして確認し、訂正するよう指導した。以下、その例を2つ紹介する。

<例1>

日本語学習者 B：Nさんはよくレストランに行きますか？りょうりをつくらない人はよくレストランに行きますか？スーパーは新しいから、日本で食べ物の古い店もありますか？しつれいしまして、たぶんこのしつもんはちょっとむずかしいです。

ここでは、「食べ物の古い店」では意味を誤解される可能性が高いので、学習者 B にツイートを送り、何が知りたいのか確認した。ここでは、日本に古くか

らある飲食店（例えば、そば屋など）について質問したかったということであった。

<例 2>

日本語学習者 C：じゃあ、すごいですね！いいなあ。私は行動主義者になるために毎日はきしを勉強したり、本を読んだりします。Sさんの勉強は、何のためでしょうか。Sさんも行動主義者になりたいですか。

日本の大学生 S：私は行動主義者になるために勉強しているわけではなく…このグローバル社会の中で起こる文化摩擦を軽減していく方法を考えるために異文化コミュニケーションを勉強しています。

ここでは、「行動主義者」の意味がよくわからないままツイートが続けられているようだったので、日本の大学生 S に直接ツイートして、「行動主義者」の意味の確認し、意味がわからなかった場合には日本語学習者に確認してほしいと連絡をした。その後、以下のようなツイートのやり取りが行われた。

日本の大学生 S：すみません、行動主義とはどういった意味ですか？

日本語学習者 C：どうもすみませんでした。失礼しました。『活動家』みたいな言葉を書きたかったんですけど、間違っていたんですね。それで、活動家になりたいですね。大学には活動家になりたい人は多いですか？ほとんど私の友達や先生が活動家です。

これ以降、活動家の話から、将来何をしたいか、そして留学について、グローバルな人材などの話に発展していった。

3.6. プレゼンテーション

プロジェクトのためのツイートは12月4日までとし、次の週は各日本語学習者にテーマは決め、そのテーマに沿ってプロジェクトのツイートをまとめた。日本語学習者本人のツイートだけでなく、日本の大学生のツイートやクラスメートのツイートも活用して、クラスプレゼンテーションをするために準備し、発表した。準備の時間として授業時間を2コマ与えたが、もっと時間が必要だったので、宿題という形をとった。

発表のためには Storify を使った。Storify はクラウドベースのツールで、ツイートやブログをまとめてストーリーにするためのツールである。発表準備の授業1コマ目は、テクノロジー担当者に来てもらい、日本語学習者このツールの使い方を教えてもらいながら、作業を始めた。発表当日は、日本歴史の助教授、日本文学の助教授、日本語上級学習者にも発表を聞いてもらった。

発表のテーマは以下の通りである。

- 食生活とアルバイト

- エクストラカリキュラムと祝日
- サークル活動、学生の活動、学生運動
- 大学のコースについて
- 学生の趣味と留学
- 日本の大学のカリキュラム

クラス発表後、日本語学習者の Storify はハッシュタグに載せ、日本の大学生とも共有した。この時点で、ツイッタープロジェクトの終了とした。

4. 学習者の反応

プロジェクト終了後、グーグルフォームを使って、日本語学習者のアンケート調査を行った。この調査には英語を使った。

このプロジェクトを楽しんだかどうかについての質問は、とても楽しかったという回答は2人だけで、あとは、全然楽しめなかった (1)、楽しめなかった

(1)、どちらでもない (1) という回答であった。理由の中で多かったのは、「時間がかかり過ぎる」 (5) 「日本語でツイートするのが難しい」 (4) 「成績になるのでプレッシャーがある」 (3) であった。(理由は複数回答可)

難しさについての質問は、非常に難しかった (4)、難しかった (1)、どちらでもない (1) という回答であった。その理由は、「毎日ツイートしなくてはならない」 (5) 「長さが限られている」 (3) 「自分のツイートが評価される」

(3) というのが多かった。(理由は複数回答可) このプロジェクトがもっと楽に感じるためには何が必要だと思うかという質問については、「自分の日本語がもっと上手であれば」 (5)、「もっと日本語の語彙を知っていれば」 (4) という回答を得た。(複数回答可)

このプロジェクトを通して何が上手になったと思うかという質問については、「日本語の文章を書くこと」 (5)、「日本人が書いた文章を読むこと」 (4) 「コンテキストの中で日本語を使うこと」 (3) という回答を得た。(複数回答可)

また、このプロジェクトを通して日本語学習において何に気がついたかという質問では、「日本人とコミュニケーションをするためにはもっと日本語の勉強が必要だということ」 (5)、「日本語の語彙を増やす必要がある」 (5) であった。

(複数回答可)

クラスメートの発表から学んだかどうかについては、よく学んだ (3)、学んだ (3)、という回答であった。このプロジェクトを翌年の日本語中級学習者に勧めるか否かという質問については、強く勧める (5)、勧める (1) であった。

記述式の回答では、このプロジェクトを通して、各日本語学習者が自分の日本語がプロジェクトの前より上手になったと答えている。特に、読み書きについて自分の日本語がよくなったと感じている。また、コンテキストの中で日本語を考えたり、コミュニケーションをしたりする必要性も実感したと答えている。

5. 日本の大学生の反応

日本の大学生 12 名から回答を得た。このプロジェクトへの参加を決めた理由は「日本語の勉強を助けてあげたいと思った」(9)、「異文化コミュニケーションに興味があった」(9)が最多数の回答であった。(複数回答可)内容についての質問には「日本とアメリカの違いがあった」(11)、「色々勉強になった」(9)、「知らない情報があった」(7)、「考えたことがないことを質問された」(7)という回答を得た。また、12名全員参加してよかったと回答した。

日本の大学生の中の記述回答の中で、日本語学習者が決まった日本の大学生とツイートのやり取りをしがちで、割り込んでツイートをするのが難しくて新しい日本語学習者とツイートできなかつたのが残念だというのがあった。これについては、考察のところで述べたい。

6. 考察

今回のツイッタープロジェクトが日本語の特に『読み』と『書き』と『やり取り』のスキル上達のための練習になり、プロジェクトを通して日本語学習者に自己評価で上達を自覚させることができた。また、学習者に日本語の学習のさらなる必要性を感じさせることもでき、動機付けにつながられた。

リン達が先行研究で述べているように、SNS を使うことで言語学習者に母語者とのコミュニケーションスキルをつけさせられるだけでなく、学習言語母語者との関係を築き、そのコミュニティへの参加を促すことができる。(Lin at el. 2016) 実際、春学期に留学した日本語学習者は、今回のプロジェクトに参加した日本の大学生と東京で定期的に会っていた。留学する前に日本人の知り合いがいることは、学習者にとっては心強く、留学のさらなる動機付けにもなるだろう。すでに、日本語母語者とのツイッター上のやり取りの経験をして日本へ留学するのであるから、コミュニケーションギャップは経験のない学習者と比べると少ないかもしれない。これは、引き続き日本語学習者の動向を観察していく必要がある。

先行研究の例にもあるように、ツイッターの環境それだけでは学習者の動機付けにならないということも今回の実践で実証された。(Nemoto & Berez. 2010, Zaina at el. 2016) アンケート調査の結果を見てもわかるように、日本語学習者は1日1回のツイートを負担と感じている。そのため、コースの成績に取り入れることで、学習者にツイートをするように指導する必要がある。

また、ツイッターを使って学習効果を上げるためには、タスクを課す必要があると考えられる。加藤達はスカイプを使ってアメリカの大学の日本語学習者と日本の大学の英語学習者のコミュニケーションの研究結果の中で、コースに組み入れられ、意味のあるコミュニケーションの場合言語習得の有意義なツールだと結論付けている。(Kato at el. 2016) 今回の場合、日本の大学生の学生生活を知るというタスクを課したが、タスク自体も学習者主導で決めさせることもできる。

本稿のはじめで述べたが、学習者のコミュニケーションスキルの低下は今回のプロジェクトでも明らかだった。プロジェクトを始めた当初は、日本語学習者のツイートでは、まず、質問→回答、次に新しい質問→回答というパターンが見ら

れ、返信のツイートから次のツイートに発展させることが難しかった。しかし、やり取りが進む中でこれは改善されていった。

文化理解能力については、アンケートには以下の回答があった。

- It was enlightening to be able to tweet to the students in Japan, learn about their experiences and perspectives.
- I learned quite a bit about what was going on to school in Japan.
- It is important to get to know Japanese culture as told by Japanese people, not based on the positions of the people who wrote out textbook.

ツイートを通して、文化や生活習慣、考え方の違いを経験したことがわかる。

また、SNSの特徴ではあるが、共通の趣味や興味を持つ者同士がSNSで繋がるように、今回のプロジェクトでも、日本語学習者は共通の興味や趣味を通して日本の大学生と繋がり、一度繋がるとその日本の大学生としかツイートしない傾向が見られた。これは、例に挙げたツイートのやりとりを見ても明らかである。今回のプロジェクトでは、一人の日本の大学生が、本大学の日本語学習者一人一人にツイートの返信をした。これによって、日本語学習者のツイートの相手が増えたことは言うまでもない。日本の大学生の中で、このやり方に順ずる者が出てきたので、本大学の日本語学習者はより多くの日本の大学生とツイートのやり取りをすることができた。しかし、本大学の学習者から、新しい日本の大学生へのツイートはできなかつた。次回は1週間ごとに、前週とは違う人にもツイートすることを義務化して、今回のような問題を回避した方がいいであろう。

7. 課題

最後に、テクニカルな問題について述べておきたい。3.5のモニターとフィードバックのところでも述べたが、ハッシュタグに載らないツイートがあることに留意しなければならない。アンドロイドの携帯電話を使って初めてツイッターをする場合、ハッシュタグに載らないことがある。このことについては、本大学のテクノロジー担当者にも問い合わせたが、解決策は見出せなかつた。今回の場合、アンドロイドの携帯電話機種で、初めてツイッターをした日本の大学生のツイートがハッシュタグに載らなかつた時期がしばらくあった。その間、この大学生のツイートは、担当者が再ツイートしてハッシュタグに載せるようにした。プロジェクトを進めていくうちに、ハッシュタグに載るようになったが、気をつけておく必要があるのは言うまでもない。

8. 結論

ボラウ達が先行研究で述べたように、ツイッターを使用して、学習者のコミュニケーション力や文化理解能力をトレーニングできることが今回のツイッタープロジェクトの実践でも確認された。近隣に日本人コミュニティがなくても、教室外で日本語母語話者とのコミュニケーションをする機会を学習者に与えることができ、さらに、オーセンティックな内容のコミュニケーションを留学せずに学習者に体験させることができた。日本語学習者自身が自己評価で、自己の『読み』と『書き』の上達を感じることができたと同時に、もっと上達したいという学習の動機付けにつながった。毎回同じ者同士でツイートをする傾向が見られたが、

次回は前の週にツイートをしなかった者とツイートをするように指導し、違った相手とツイートをすることがどのように学習者に影響を与えるか考察したい。

参考文献

- 近藤ブラウン妃美 (2012) 『日本語教師のための評価入門』くろしお出版
- Borau, Kerstin, at el. (2009). Microblogging for Language Learning: Using Twitter to Train Communicative and Cultural Competence. In M. Spaniol, at el. (Eds.), *Advances in Web Based Learning – ICWL 2009*, 78-87, Berlin, Germany: Springer-Verlag.
- Kato, Fumie, at el. (2016). Mutually Beneficial Foreign Language Learning: Creating Meaningful Interactions Through Video-Synchronous Computer-Mediated Communication. *Foreign Language Annals Vol 49 (2)*, 355-366.
- Lin, Chin-Hsi, at el. (2016). Language Learning Through Networks: Perceptions and Reality. In D. Chun & T. Heift (Eds.), *Language Learning & Technology Vol 20 (1)*, 124-147
- Nemoto, Naoko & Beres, Daryl. (2010). Starting Life-long Japanese Learning via Twitter. A proceeding of the 17th Princeton Japanese Pedagogy Forum, 52-61.
- Zaina, Luciana A. at el. (2014). Can the Online Social Networks Be Used as a Learning Tool? A Case Study in Twitter. In L. Uden, at el. (Eds.), *Learning Technology for Education in Cloud. MOOC and Big Data. Communication in Computer and Information Science Vol 446*, 114-123.